

ビデオ観察とナラティブ分析の方法論

Approaches from Working Memory to Elucidating Reasoning Abilities of Mental States in
Young Children

研究代表者 黒田 真由美 (D3) 教員 山田 洋子
研究分担者 小林 信一 (D3) 高橋 菜穂子 (M1)

【研究目的】

近年のナラティブ・アプローチでは、人が意味づける行為を取り上げ、研究者も含めた人間についての研究が行われている。各当事者の出来事への意味づけだけではなく、研究者の同じ出来事への意味づけについて分析がなされている。一つの出来事でも人によって捉え方が異なり、様々な見方をすることによって、心理的リアリティに迫ることが可能となる。ナラティブ・アプローチの有効性は多くの研究の中で示されているにも関わらず、その分析方法を学ぶ機会はあまり設けられていない。そこで、ナラティブデータの解釈、特に、ビデオ観察によって収集したデータの分析方法について理解を深めるため、先行研究をもとに方法論をまとめ、さらに、メンバーが行っているナラティブ分析を見直し、質的研究における分析方法について理解を深めることを試みる。方法論に関する理解を深めること、研究者としてフィールドとの関わり方を見直すことが目的である。

【研究経過】

前期は文献研究、後期はデータセッションを中心に行い、また、質的心理学会に参加し、知見を深めた。文献研究では、分析方法についての基本的な知識を整理した。そして、フィールドと関わり調査をする際に持つべき意識や注意点を明確にし、また、データ分析の可能性や注意すべき点についても学んだ。データセッションでは、参加者がフィールドで得られたナラティブデータを持ち寄り、文献研究をふまえ、その分析過程を共有した。質的心理学会は、心理学に限らず境界横断的なジャンルの研究に関する議論が活発に行われている場であり、質的データの分析について学ぶ場として適している。そこで、学会への参加も通して、データの分析方法についての学びを深めた。

〔研究成果〕

研究成果としては、(1) 文献研究、(2) 学会参加、(3) データ分析があげられる。それぞれについて、以下で述べる。

(1) 文献研究

本読書会は、質的研究とは何かという質的研究全体の俯瞰から行われた。未知の現象にアプローチするとき、既成の理論に基づいたやり方には限界があり、また、研究とは客観的であるべきだというそもそもの理想が崩れ始めたことに対し、質的研究の意義として、①研究対象に適した方法と理論の適切性、②当事者の視点とその多様性、③研究者による自己の研究に関する反省、④アプローチと方法の多様性、に関する検討が行われた。

(2) 学会参加

質的心理学会に参加し、メンバー全員が個人研究発表を行い、大会企画のシンポジウムに参加した。

個人の研究発表では、学会でデータ分析を基にした発表をすることで、その分析に関して異なる視点からの意見や質問を受けた。これにより、コロキウムとはまた異なる議論が展開したり、新たな見解が得られた。

また、シンポジウムでは、結城幸司氏に彼の半生と現在が語られた。結城氏のナラティブは重厚かつ多声的であり、筋の整った整合的な物語にはならなかったとの見方も出来る。彼の語りには、共同性に不可避的につきまといわれつつ、ズレながら、固定的な結論に至らない対話のなかで個として向き合い続ける様子がみられた。予期できないライブの語り立ち会い、共同生成としての語りが生み出されたものと考えられる。

(3) データ分析

実際に現場で収集したデータを基に、参加者が共同で分析を行った。質的データの分析プロセスにおいては、しばしば研究プロセスの可視化の必要性が指摘されているが、本コロキウムでは、分析対象である語りデータと、その分析手続きのプロセスを参加者で共有することを通して、より透明度の高い分析を行うことを目指した。

高橋のインタビューデータをもとに、次のような展開でデータの検討がなされた。第一段階では、プレ・インタビューから施設の支援実践をとらえるカテゴリーを生成し、それを基に、本研究の下地となる<基本枠組み>を構成した。第二段階では第一段階で構成した<基本枠組み>である「子どもを取り巻くシステムとのつながりを視野に入れた児童養護施設の支援モデル」を基に、研究デザインを構成し、本インタビューを実施した。さらに、本インタビューの語りデータを検討することにより、<基本枠組み>を修正・追加し、より現場の現実性に迫る支援実践モデルを構成した。

データ分析により、単独での分析よりも重層的な視点を確保し、単独では導き出せないような協働的かつ生成的な知へと、分析知見を発展させることが可能になった。